

村上春樹の「非翻訳文体」

On Haruki Murakami's Non-English Style

塩 濱 久 雄

キーワード：文体、翻訳

要 約

村上春樹の作品には米文学の影響が大きい、という考えが広く流布している。台詞や比喩表現等に米文学からの影響が見られることは明らかであるが、本稿はその文体自体は必ずしも英語的ではない、ということ論証するものである。

0. はじめに

平林美都子「村上ブランドはなぜ売れるのか？ —アメリカ的消費文化から世界的消費文化へ」（『村上春樹スタディーズ2008-2010』 pp.46~64）に、村上春樹の文体について「彼の『翻訳文体』は作家人生が始まって以来、三〇年近くつづいているのである」とある。

氏がこのように判断する根拠は、村上の特にアメリカの映画・テレビ・音楽などを通しての異文化体験と、翻訳小説を中心とする読書体験と、つづく村上自身の翻訳体験が彼の小説に影響を与えているだろうということと、「きゅうりのごとくクール」などのいくつかの英語に基づく比喩などの使用例である。

論考中で、「文体」の定義は行われていないが、ウィキペディアの「文体」の項にある「作家や作品に固有の表現としての文体。比喩などレトリックの特徴や用字・用語の使用頻度などが根拠になることもある」というのが、ここで用いられている「文体」と考える。そして、その「文体」が英語・英語文化の影響下にある、というのが平林氏のいう「翻訳文体」なのであろう。

筆者はかつて『ダンス、ダンス、ダンス』の登場人物の一人「牧村拓」が「村上春樹」のアナグラムであることを指摘したことがあるが、これは、それぞれの名をローマ字表記しなければわからない（Makimura Hiraku→Murakami Haruki）。もちろん、筆者がこれに気づいたのは英語版を読んだからである。

また、『羊をめぐる冒険』に次のような一節がある。

照明が落とされ、ウェ이터が長いマッチを擦って赤いキャンドルに火をつけてまわり、ヘッド・ウェ이터がにしんのような目つきでナプキンや食器や皿の並べ方を細かく点検していた。ヘリンボーン型に組みあわされたオークの床板は綺麗に磨きあげられ、ウェ이터の靴底がコツコツと気持ちの良い音を立てていた。(49)

筆者は「にしんのような目つき」の「にしん」と、「ヘリンボーン」の原語 herringbone の herring (にしん) とが言語を越えた「しゃれ」になっていると考えている。「にしんのような目つき」がどのような「目つき」であるのかはこの場合問題外である。この読みが正しければ、村上は「きゅうりのごとくクール」よりも手の込んだことをここで言っていることになる。ちなみに、この部分の英訳は以下の通りである。

The lights were dimmed, a waiter came around with a long match to light the red taper on our table, and the maitre d'hotel cast fishy eyes over the napkins and dinnerware to be sure all was in place. The herringbone lay of the oak floor boards gleamed to a high polish, and the waiter walked about with a click of his heels. (35)

「にしんのような目つき」が fishy eyes と訳されているが、fishy eyes は直訳すると「魚のような目」である。しかし、その意味するところは「どんよりとした目」である。訳者は、「しゃれ」に気づかなかったのであろう。

「翻訳文体」の定義にもよるが、以上のようなことを指して、村上の文体が「翻訳文体」であるという意見に筆者は与しない。たしかに「英語表現」などに基づく部分が散見されるとしても、村上の文章自体が「翻訳文体」なのではない。あるいは、平林氏の言う「翻訳文体」と筆者の言う「翻訳文体」が違うものを指していると言ってもよい。

1. 村上春樹の原文とその英訳との文順の比較。

極論であるが、もし村上春樹の文章自体が「翻訳文体」なのであれば、それを英訳した場合に、ほぼ直訳で自然な英語になるはずである。たとえば、「恋に落ちる」という表現がある。これは英語の fall in love を和訳したものが、日本語表現として定着したものである。すると、「恋に落ちる」は「翻訳文体」である。今では翻訳臭があまりしないが、もとは英語である。「何があなたをそうさせた」は日本語として熟していないので翻訳臭がするが、これも「翻訳文体」である。もちろん英語にすると What made you do so? であるが、このような日本語を村上が使っているわけではない。

文の順番（描写の順番）に関しても同様で、村上の原文とその英訳とが同じ文順になっていれば「翻訳文体」と言えるかもしれない。しかし以下で例証するように、原文とその英訳とで

大きくその文順が異なっている例がある。これが、村上の文体（文順）が独自のものなので英訳すると文順が変わってしまうのか、そもそも日本語と英語の本質的な違いにその原因があるのかは、先の課題であるが、以下の例はすべて村上春樹の作品からのものである。

本項では文順の違いを（１）一貫性（２）見出し効果（３）視覚に入った順、という３つに分けて例証する。

（１）一貫性

図書館のドアを押したとき、建物の中の空気は心なしか以前より淀んでいるように思えた。長いあいだうち捨てられていた部屋のようにそこには人の気配というものが感じられなかった。ストーヴの火は消え、ポットも冷えきっていた。ポットのふたをあけてみると、中のコーヒーは白く濁っていた。天井はいつもよりずっと高く感じられた。電灯も消え、僕の靴音だけがその薄闇の中に妙にほこりっぽい音を立てて響いた。彼女の姿はなく、カウンターの上にはほこりが薄くたまっていた。『世界の終り』（上347）

この部分の英訳は次のようになっている。

As I push open the Library door, the air in the building hangs still and musty, more so than I recall. It is unlit and only my footfalls echo in the gloom. The fire in the stove is extinguished, the coffeepot cold. The ceiling is higher than it was. The counter lies under dust. She is not to be found. There is no human presence.

英訳されている順番に原文を引用すると（英訳を再び和訳しているのではない）、「（１）図書館のドアを押したとき、建物の中の空気は心なしか以前より淀んでいるように思えた（２）電灯も消え、僕の靴音だけがその薄闇の中に妙にほこりっぽい音を立てて響いた（３）ストーヴの火は消え、ポットも冷えきっていた（４）天井はいつもよりずっと高く感じられた（５）カウンターの上にはほこりが薄くたまっていた（６）彼女の姿はなく（７）そこには人の気配というものが感じられなかった」となる。

「図書館のドアを押した」のあと、原作も英訳も「部屋の中の空気」に関する描写が行われている。原文ではその次に「人の気配」に移るのであるが、英訳では（１）に続いて「電灯」「ストーヴ」「天井」「カウンター」に関する描写が行われている。これらは部屋の中に「ある」具体的な物ということで、この順番には一貫性がある。そして最後に She is not to be found. There is no human presence と「ない」ものが挙げられている。ここにも一貫性がある。

この「描写の一貫性」という点に関して、原文と英訳との違いは大きい。この、英語と較べての「一貫性のなさ」が村上の文体の特徴ではないか、というのが（１）の主題である。

以下、類例を挙げる。

目を覚ましたのは朝の九時だった。ベッドの隣には彼女の姿はなかった。おそらく食事を取りに出て、そのまま自分の部屋に帰ったのかもしれない。書き置きはなかった。洗面所には彼女のハンカチと下着が干してあった。『羊をめぐる冒険』(186)

I woke up at nine in an empty bed. No note. Only her handkerchief and underwear drying by the washbasin. Probably gone out to eat, I guessed, then to her place. (161)

(コメント)

英文を和訳すると、「僕は空のベッドで九時に目を覚ました。書き置きはなかった。彼女のハンカチと下着だけが洗面台のそばに干してあった。たぶん、外へ食事に行って自分の部屋に帰ったのかもしれない」となる。「ベッドの隣には彼女の姿はなかった」と「書き置きはなかった」が連続して訳されている。原文では事実と事実のあいだに推測が入っているのだが、英訳ではそれが避けられている。

棚には色ちがいのタオルがきちんと折りたたんで十枚ほどかさねてある。いかにも鼠らしい几帳面さだった。鏡にも洗面台にもしみひとつない。『羊をめぐる冒険』(330)

Ten hand towels, each a different color, lay neatly folded on the shelf. Not a spot on mirror or washbasin. True to methodical Rat-form. (290)

(コメント)

上の例でもそうであるが、原文では事実と事実のあいだに、この場合は感想が入っているのだが、英訳ではそれが避けられている。

眠りから覚めたとき、あたりの温度はおどろくほど低下していた。僕は思わず身ぶるいをし、上着をしっかりと体にあわせた。日が暮れかけているのだ。『世界の終り』(上302)

I awake to find that the day is nearly over, that the temperature has dropped sharply. I am shivering. I pull my coat tight around me.

(コメント)

英文を和訳すると、「眠りから覚めると、一日が終わりかけていたで、気温が急に下がっていることがわかった。僕は震えていた。上着をしっかりと身体にあわせた」となる。周囲の様子がまず訳出され、「僕は思わず身ぶるいをし、上着をしっかりと体にあわせた」が最後に訳されている。

しかしそれは決して楽な探索ではなかった。途中にはまるでごっそりと地面が陥没したあのような深く切れこんだ溝があり、僕の背たけよりもずっと高く繁茂した巨大な野いちごの茂み

があった。行く手を阻む湿地があり、いたるところに大きな蜘蛛がねばねばとした巣をはって、それが僕の顔や首や手にまとわりついた。ときおりまわりの茂みで何かのごそそとうごめく音が聞こえることもあった。巨木の枝が頭上を覆い、森を海の底のような暗色に染めていた。樹木の根もとには大小さまざまな色とりどりのきのこが姿を見せ、それはまるで不気味な皮膚病の予兆のようにも見えた。『世界の終り』(上296)

This does not prove easy. Mid-route there are deep hollows where the ground drops away. I step carefully, yet find myself plunged into thick blackberry brambles. Marshy ground thwarts passage; elsewhere spiders hang their webs to net my face and hands. An awning of enormous branches tinges the Woods in sea-bottom gloom. Roots crawl through the forest floor like a virulent skin disease.

At times I imagine I hear movement in the dense undergrowth.

(コメント)

原文では途中にある「ときおりまわりの茂みで何かのごそそとうごめく音が聞こえることもあった」が、英訳では最後に一行あけて訳出されている。視覚情報をひとまとめにして、聴覚情報を最後に回しているのである。

「この道をずっと辿っていくと、昔の祭壇に行きつくはずよ。そして祖父はたぶんそこに隠れていると思うの。なぜならこの聖域の中でも祭壇はもっとも神聖なもので、たとえ誰であろうとそこに近づくことはできないから。そこに隠れている限り絶対に捕まる心配はないの」『世界の終り』(上455)

“If you follow this through, you get to the ancient altar. It’s the holiest spot in this sanctuary. No INKling would go near it. That’s probably where Grandfather is, safe and sound-removed.”

(コメント)

英文を和訳すると、「この道をずっと辿っていくと、昔の祭壇に行きつく。それはこの聖域の中でもっとも神聖なものである。やみくろはそこに近づかない。祖父はたぶんそこに無事で音抜き状態で隠れている」となる。英訳では祭壇に関することをひとまとめにし、祖父に関することをひとまとめにしている。ちなみに、原文に「音抜き」はないのに、英訳には sound removed とあるのは、英語の safe and sound (無事に) を用いたしゃれである。これは英訳者が工夫したことであろう。

自分では気がつかなかったのだけれど、私は地面に腰を下ろして壁にもたれかかっていた。たぶん知らず知らずのうちに眠りこんでいたのだ。地面も壁も水に濡れたようにぐっしょりと湿っていた。『世界の終り』(上460)

I was on the ground, back against a wall, dripping wet. I had dozed off without knowing it.

(コメント)

「地面に腰を下ろして壁にもたれかかっていた」から「地面も壁も水に濡れたようにぐっしょりと湿っていた」とわかるので、これを英訳では続けている。

その当時は誰も彼もが髪を長くのばして、汚い、靴をはき、サイケデリックなロックを聴き、背中にピース・マークをつけた米軍払い下げの戦闘ジャケットを着て、ピーター・フォンダのような気分になっていた。『世界の終り』(上462)

Everybody and his brother had long hair, wore dirty sandals and army surplus jackets with peace signs on the back, tripped out to psychedelic music, thought they were Peter Fonda,

(コメント)

原文は「身につけているもの」→「聴いているもの」→「身につけているもの」順になっているが、英訳は「身につけているもの」→「身につけているもの」→「聴いているもの」の順になっている。

それから私は目の前にあるノートと鉛筆をチェックしてみた。きれいに削った五本のFの鉛筆のうち、二本は折れ、二本は根もとまで丸くなり、一本だけがまっさらなまま残っていた。右手の中指に長い時間書きものをした時のような軽いしびれが残っていた。シャフリングは完成していた。ノートにはぎっしりと十六ページにわたって細かい数値が書きこまれていた。『世界の終り』(上247)

I ran down my checklist. Of the five pencils in front of me, two were broken, two were worn all the way down, and one was untouched. The notepad was filled with sixteen pages of tiny digits. The middle finger of my right hand tingled, slightly, as it does after a long stint of writing. (125)

(コメント)

「右手の中指に長い時間書きものをした時のような軽いしびれが残っていた」が最後で訳出されている。

『カサブランカ』風にピアニストを一人出してきてもいい。アルコール中毒のピアニストだ。ピアノの上にもいつもレモンをしぼっただけのストレートのジンのグラスが置いてある。彼は二人の共通の友人で、二人の秘密を知っている。才能のあるジャズ・ピアニストだったのにアルコールで身を持ち崩したのだ。『世界の終り』(下197)

Cut: enter piano player, like in Casablanca. Alcoholic, always keeps shot glass of gin, straight with twist of lemon, on top of piano. A jazz musician of some talent until his career went

on the rocks, he befriends both man and woman, knows their secrets...

(コメント)

「彼は二人の共通の友人で、二人の秘密を知っている」が英訳では最後に訳出されている。

僕はベッドの中から部屋を見まわしてみたが、部屋にはとくにかわった点はなかった。天井も四方の壁も少しいびつに歪んだ床も窓のカーテンも、いつもと同じだった。テーブルがあり、テーブルの上には手風琴があった。壁にはコートとマフラーがかかっていた。コートのポケットからは手袋がのぞいていた。『世界の終り』(下212)

I look around the room from my bed. Nothing out of the ordinary. Ceiling, walls, warped floorboards, curtains in the window. Coat and scarf hanging on the wall, gloves peeking out of the coat pocket. There is the table and there, the musical instrument on the table.

(コメント)

英文を和訳すると、「僕はベッドの中から部屋を見まわしてみたが、部屋にはとくにかわった点はなかった。天井も四方の壁も少しいびつに歪んだ床も窓のカーテンも。壁にはコートとマフラーがかかっていた。コートのポケットからは手袋がのぞいていた。テーブルがあり、テーブルの上には手風琴があった」となる。英訳では「壁」の描写に一貫性を持たせている。

世界中どこにいても、わたしはこの時刻がほかのどんな時刻よりも好きだ。この時刻はわたしひとりのものだ。そして私は机に向かってこの文章を書いている。間もなく夜が明けるだろう。『スプートニク』(198)

No matter where I find myself, this is the time of day I love best. The time that's mine alone. It'll be dawn soon, and I'm sitting here writing.

(コメント)

後半の2文の順番が逆。時間に関する描写の一貫性。

真夏とはいっても、スイスの夜は涼しい。ミユウは薄いブラウスに綿のショート・スカートという軽装だった。風が吹き始めている。『スプートニク』(229)

Miu was dressed only in a light blouse and short cotton skirt, and though it was the middle of summer the Swiss night air was chilly. The wind had picked up.

(コメント)

最初に「服装」を持ってきて、気候に関する話題を一貫させている。

(2) 見出し効果

(2) では、筆者が「見出し効果」と名付けている現象について述べる。代表的な例を挙げる。

電話に出た相手は若い女の子だった。女の子？おいよせよ、と思った。いるかホテルはカウンターに若い女の子がいるようなホテルではないのだ。

「ドルフィン・ホテルでございます」と彼女は言った。『ダンス、ダンス、ダンス』(上54)

“Hello, Dolphin Hotel!” went a cheerful voice.

It was a young woman. A woman? What’s going on? I don’t remember woman being there. (18)

英訳では、最初に「ドルフィン・ホテルでございます」の部分が訳出されている。普通に考えれば、このあとに「電話に出た相手は若い女の子だった」となるはずである。しかし、村上は先に結論的判断を置き、そして具体例を置いているのである。

以下は類例である。

夕方まで僕はホテルの中を見物して時間を潰した。レストランやバーをチェックし、プールやらサウナやらヘルス・クラブやらテニス場やらを覗き、ショッピング・センターに行って本を買ったりした。ロビーをうろつき、ゲーム・センターでバックマンを何ゲームかやった。そんなことをしているだけでたちまち夕方になってしまった。『ダンス、ダンス、ダンス』(上74)

I puttered around in the hotel, seeing what there was to see. I checked out the restaurants and lounges, took a peek at the pool and sauna and health club and tennis courts, bought a couple of books in the shopping arcade. I crisscrossed the lobby, then gravitated to the game center and played a few rounds of backgammon. That alone took up the afternoon. (29)

(コメント)

文頭の「夕方まで」が訳出されていない。原文の最初の一文はこの段落の「見出し」である。しかし、原文最後にも「夕方」が出てくるので英訳では初めの「夕方」が省略されたのであろう。

僕は店を出て、ホテルに戻った。けっこう遠くまで来ていたが、ホテルに戻る道を見つけるのは簡単だった。『ダンス、ダンス、ダンス』(上77)

I left the bar and headed back to the hotel. I’d walked a fair bit, but it wasn’t hard finding my way back. (31)

(コメント)

「戻った」が headed back (もとへ向かった) となるが、これは原文の「戻った」を「ホテル

に戻った（着いた）」ととると、「ホテルに戻る道を見つけるのは簡単だった」と矛盾すると考えたためと思われる。同じ時間帯に起こったことを繰り返している。ある意味無駄であるがこれが読みやすさにつながる。スローモーション。

何をやっても上手くいきそうにない日だった。髭をそっていて顎を切り、シャツを着ようとすると袖のボタンが取れた。『ダンス、ダンス、ダンス』（上83）

I cut my chin shaving, then popped a button from my cuff getting into my shirt. The signs for the day were not good. (34)

（コメント）

英文を和訳すると、「僕は髭をそっていて顎を切り、そして袖からボタンが弾けとびシャツの中に入った。その日の兆候はよくない」となる。

次にタクシーを拾って図書館に行った。札幌でいちばん大きい図書館に行ってくれと言うとちゃんと連れていってくれた。『ダンス、ダンス、ダンス』（上122）

Then I got in a taxi and told the driver to take me to the biggest library in Sapporo. (52)

（コメント）

英文を和訳すると、「そして僕はタクシーに乗って、札幌でいちばん大きい図書館に行ってくれと言った」となる。

彼らは午後の三時過ぎにやってきた。二人連れだった。僕がシャワーを浴びている時にドア・ベルが鳴った。僕がバスローブを着て、ドアを開けるまでにドア・ベルは八回も鳴った。苛立ちが肌につきささってくるような鳴らし方だった。僕がドアを開けると、男が二人立っていた。『ダンス、ダンス、ダンス』（上332）

They showed up a little past three in the afternoon. I was in the shower when the doorbell started ringing. By the time I got there, it was on ring number eight. I opened up, and there stood two men. (164)

（コメント）

原文第2文の「二人連れだった」が訳出されていない。最後に「男が二人立っていた」とあるからと考えられる。

朝起きて、僕は駅まで新聞を買いに行った。九時前だったので、通勤する人々が渋谷の駅前を渦巻いていた。春だというのに、微笑んでいる人は数えるほどしか見あたらなかった。そしてそれだってあるいは微笑ではなくて、ただ顔がひきつっていただけなのかもしれない。僕は売店で新聞を二紙買い、ダンキン・ドーナツでドーナツを食べ、コーヒーを飲みながらそれ

を読んだ。(下16)

After waking the next morning, I went to the train station. Before nine and Shibuya was swarming with commuters. Yet despite the spring air, you could count the number of smiles on one hand. I bought two papers at the kiosk, went to Dunkin' Donuts, and read the news over coffee. (212)

(コメント)

「新聞を買いに」が訳出されていない。これは、この後で「新聞を二紙買い」とあるためと考えられる。

そのスーツケースは二階の廊下の突き当たりにある部屋においてあった。スーツケースのネームタグにはいかにも几帳面そうな字でディック・ノースという名前と豪徳寺の住所が書いてあった。ユキがその部屋に僕を案内してくれた。屋根裏部屋のような狭く細長い部屋だったが雰囲気は悪くなかった。昔住み込みのお手伝いさんがいるときに、この部屋を与えていたんだとユキは言った。ディック・ノースはその部屋をとでもきちんと整理していた。小さなライティング・デスクの上には鉛筆が五本みごとにほっそりと削られて、消しゴムと一緒に静物画みたいな感じに並べられていた。壁のカレンダーには細かい書き込みがあった。ユキは戸口にもたれて、黙って部屋の中を見ていた。空気はしんとしていた。鳥の声のほかには物音ひとつ聞こえなかった。僕はマカハのコテージを思い出した。あそこも静かだった。そしてやはり鳥の声しか聞こえなかった。

僕はそのスーツケースを抱えて下におりた。スーツケースの中には原稿や本がたっぷりと入っているらしく、みかけよりずっと重かった。その重みは僕にディック・ノースの死の重みを想像させた。『ダンス、ダンス、ダンス』(下246)

Yuki showed me the study where Dick's things were. Upstairs, a long, narrow garret at the end of the hall, what had originally been the maid's room. It was pleasant enough and naturally Dick had kept everything in immaculate order. On the desk were arranged five precision-sharpened pencils and an eraser, an unqualified still life. A calendar on the wall had been annotated with meticulous handwriting. Yuki leaned in the doorway and scanned the interior in silence. All you could hear were the birds outside. I recalled the cottage in Makaha. It had been just as quiet, and there had been birds too.

The tag on the suitcase, also in Dick's hand, had his name and address. I lugged it downstairs. With his books and papers, it was much heavier than it looked. The weight yet another reminder of the fate of Dick North. (314)

(コメント)

原文では「ユキがその部屋に僕を案内してくれた」の前に「そのスーツケースは二階の廊下の突き当たりにある部屋においてあった。スーツケースのネームタグにはいかにも几帳面そう

な字でディック・ノースという名前と豪徳寺の住所が書いてあった」とあるので、訳者はこれを不自然に感じたので、最初に「ユキがその部屋に僕を案内してくれた」の部分の訳を置き、次の段落で「スーツケースのネームタグ」に関する部分を持ってきたものと考えられる。

図書館で僕は新聞の縮刷版のページを繰って、この何ヵ月かに起こった殺人事件をひとつひとつ丁寧に調べた。『ダンス、ダンス、ダンス』(下279)

I began going to the library, leafing through the bound editions of newspapers, reading every murder case of the last few months. (331)

(コメント)

英訳は *began going to the library* (図書館に行き始めた) と始まっている。このように訳されているのは、このあとに調べた内容について書かれているからと考えられる。

我々はまわりの風景に目をやりながら、ゆっくりと川上に向かって歩いた。そのあいだ僕も彼女もほとんど口をきかなかったけれど、それは話すことがないからではなく、話す必要がないからだった。大地のくぼみに沿って白くのこった雪や、赤い木の実をくちばしにくわえた鳥や、ごわごわとして肉の厚い畑の冬野菜や、川の流れがところどころに作りだす小さな澄んだ淀みや、雪に覆われた尾根の姿を我々はひとつひとつたしかめるように眺めながら歩いた。『世界の終り』(下133)

We walk at an easy pace, hardly speaking, not for lack of things to say but because there is no need. We view the scenery: snowy contours hollowed into the land, birds with beaks full of red berries, plantings thick with winter vegetables, small crystal-clear pools in the river course, the distant snowcapped ridges. Each sight bursts upon us.

(コメント)

原文では2度出てくる「歩いた」が、英訳では最初のところでだけ訳出されている。また、「まわりの風景に目をやりながら」の部分は *We view the scenery* と訳され、「大地のくぼみ～」の前に置かれている。

(3) 視界に入った順番

本項では、次例のようなものを扱う。

ロビーの奥にはゴージャスなコーヒー・ルームがあった。こういうところでサンドイッチ注文すると名刺くらいのサイズの上品なハムサンドイッチが大きな銀の皿に四つもられて出てくる。ポテト・チップとピクルスが芸術的に配されている。そしてそれにコーヒーをつけると、慎み深い四人家族の昼食代くらいの値段になるのだ。壁には北海道の何処かの湿原を描いたら

しい三畳間くらいの大きさの油絵がかかっていた。特に芸術的とはいえないが、とにかく見栄えのする大きな絵であることは確かだった。『ダンス、ダンス、ダンス』(上63)

The overall décor focused on an oil painting—three tatami mats large—of some Hokkaido marshland. Nothing outstanding artistically, but impressive, if only for its size. At the far end of the lobby a posh coffee bar beckoned. The sort of place where you order a sandwich and the bring you four deviled ham dainties arrayed like calling cards on a silver tray with an embellishment of potato crisps and cornichons. Throw in a cup of coffee and you're a re spending enough to buy a frugal family of four a midday meal. (22)

(コメント)

英訳では最初に原文の「壁には北海道の何処かの湿原を描いたらしい三畳間くらいの大きさの油絵がかかっていた」の部分が訳出されている。そして、次に「ロビーの奥にはゴージャスなコーヒー・ルームがあった」が続く。これは、視界に入ってきた順に描写が行われているからと考えられる。そして、最後に、「コーヒー・ルーム」の「サンドイッチ」に関するコメントが置かれているが、これは、(1)の「一貫性」の例でもある。

以下は類例である。

彼は広々としたリビング・ルームに僕らを通し、大きなソファに座らせ、台所からプリモ・ビールを二本とコークを一本とグラスを三つ盆に載せて持ってきた。僕と彼はビールを飲み、ユキは飲み物には手もつけなかった。彼はそれから立ち上がってステレオ装置の前に行き、ヴィヴァルディのボリュームを小さくして戻ってきた。何となくサマセット・モームの小説に出てきそうな部屋だった。窓が大きくて、天井には扇風機がつき、壁には南洋の民芸品が飾ってあった。『ダンス、ダンス、ダンス』(下75)

Dick showed us into the spacious living room. The room had large windows and a ceiling fan, like something out of a Somerset Maugham novel. Polynesian folkcrafts decorated the walls. He sat us on the sizable sofa, then he brought out two Primos and a coke. Dick and I drank our beers, but Yuki didn't touch her drink. (239)

(コメント)

英文を和訳すると、「ディックは広々としたリビング・ルームに僕らを通した。窓が大きくて、天井には扇風機がついていて、何となくサマセット・モームの小説に出てきそうな部屋だった。壁には南洋の民芸品が飾ってあった。彼は僕らを大きなソファに座らせ、台所からプリモ・ビールを二本とコークを一本持ってきた。僕と彼はビールを飲み、ユキは飲み物には手もつけなかった」となる。(1)の一貫性の例とも言える。

セルゲイ・ラフマニノフみたいな深刻な顔をした髪の毛の薄い中年のピアニストが、グランド・ピ

アノに向かって黙々とスタンダード・ナンバーを弾いていた。客はまだ僕ら二人だけだった。彼は「スターダスト」を弾き、「バット・ノット・フォー・ミー」を弾き、「ヴァーモントの月」を弾いた。『ダンス、ダンス、ダンス』（下157）

We were the only customers in the place. The balding pianist, with a Rachmaninoff scowl, was at the concert grand running through standards—"Stardust," "But Not For Me," "Moonlight in Vermont."

（コメント）

「客はまだ僕ら二人だけだった」が最初に訳出されている。

僕らは近くのレストランに入って、スープとスパゲッティのサーモン・ソースとすずきとサラダというランチを食べた。まだ十二時になっていなかったから店はすいていたし、味もまともだった。十二時をすぎてサラリーマンがどっと街に繰り出す頃に僕らは店を出て、車に乗った。『ダンス、ダンス、ダンス』（下348）

It was a bit before twelve, so we had the restaurant to ourselves. We filled up on soup and pasta and sea bass and salad. By the time the tide of salarymen washed in, we were out of there. (364)

（コメント）

「まだ十二時になっていなかったから店はすいていた」が最初に訳出されている。「店に入って最初に気づくはずのこと」が最初に来ている。食事に関する記述に一貫性を持たせているとも言える。

雨はまだ降りつづいていたが、服を買うのにも飽きたのでレインコートを探すのはやめ、ビヤホールに入って生ビールを飲み、生ガキを食べた。ビヤホールではどういうわけかブルックナーのシンフォニーがかかっていた。何番のシンフォニーなのかはわからなかったが、ブルックナーのシンフォニーの番号なんてまず誰にもわからない。とにかくビヤホールでブルックナーがかかっているなんてはじめてだ。

ビヤホールには私の他には二組の客しかいなかった。『世界の終り』（下280）

It was still raining, but I was tired of looking at clothes, so I passed on the coat and instead went to a beer hall. It was almost empty. They were playing a Bruckner symphony. I couldn't tell which number, but who can? I ordered a draft and some oysters on the half shell.

（コメント）

英文を和訳すると、「まだ雨が降っていた。私は服を見るのに飽きて、コートをさがすのをやめ、ビアホールに入った。ほとんど客はいなかった。ブルックナーがかかっていた。何番かわからなかったが、誰がわかるというのだろうか？私は生ビールと生牡蠣を注文した」となる。

原文最後の「ビヤホールには私の他には二組の客しかいなかった」がIt was almost emptyと

訳され、went to a beer hall の後に置かれている。これは、「ビヤホール」に入っただけで視界に入ることだからである。

その店は図書館から車で十五分ほどの距離にあった。くねくねと曲った住宅地の中の道を人や自転車をよけながらのろのろと進んでいくと、坂道の途中で突然イタリア料理店が姿を見せた。白い木造の洋風住宅をそのままレストランに転用したようなつくりで、看板も小さく、よく注意してみなければとてもレストランとはわからない。店のまわりは高い塀に囲まれた静かな住宅街で、高くそびえたヒマラヤ杉や松の枝が夕暮の空にその輪郭を暗く描いていた。『世界の終り』(下312)

The restaurant was a fifteen-minute drive from the library, dodging cyclists and pedestrians on winding residential streets. Midway up a hill, amid homes with tall pines and Himalayan cedars and high walls, appeared an Italian restaurant. A white woodframe Western-style house that now functioned as a trattoria. The sign was so small you could easily have missed the place if you didn't know it was there.

(コメント)

英文を和訳すると、「その店は図書館から車で十五分ほどの距離にあった。くねくねと曲った住宅地の中の道を人や自転車をよけながらのろのろと進んで行った。坂道の途中で高くそびえた松の枝やヒマラヤ杉や高い壁の中にイタリア料理店が姿を見せた。白い木造の洋風住宅をそのままレストランに転用したようなつくりで、看板も小さく、よく注意してみなければとてもレストランとはわからない」となり、「高くそびえたヒマラヤ杉や松の枝が夕暮の空にその輪郭を暗く描いていた」の位置が異なる。これは、先に「松の枝やヒマラヤ杉や高い壁」が見えたからと考えられる。

水晶玉を前に置いた女がミュウを手招きして呼ぶ。「マドモワゼル、こちらにいらっしやい。だいじなことですよ。あなたの運命は大きく変わろうとしています」とその大柄な女は言う。『スプートニク』(224)

Crystal ball in front of her, the fortune-teller, a largish woman, beckoned to Miu: “Mademoiselle, come here, please. It's very important. Your fate is about to change.”

(コメント)

「大柄な」が英訳では「手招きして呼ぶ」の前で訳されている。最初にその女が視界に入った時点で「大柄」であることはわかるはず、と英訳者は考えたと思われる。しかし、筆者には、原文は、最初の描写の段階から、「女」に近づいていって、そしてその前を通り過ぎるという、「距離感」を文体で表しているという風に読める。

2. 終わりに

以上、英訳と比較して、村上春樹の文体を検討した。筆者は村上春樹が広く読まれる原因の一つにその文体があると考えているが、本稿が村上理解のための一助となれば幸いである。

引用文献

原作

『羊をめぐる冒険』講談社（1982）

『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』新潮社（1985）

『ダンス、ダンス、ダンス』講談社（1988）

『スプートニクの恋人』講談社（1999）

英訳

A Wild Sheep Chase (Harvill)

Hard-Boiled Wonderland and the End of the World (Harvill)

Dance Dance Dance (Harvill)

Sputnik Sweetheart (Harvill)

参考文献

『村上春樹スタディーズ2008～2010』（若草書房）（2011）